

教職課程の模擬授業に見る中高英語教育の実際

—コミュニケーション重視の授業実践のための提言—

中野 達也

Abstract

When students in teacher-training courses at Komazawa Women's University do their teaching practice trial lessons, most of them set out to teach English using the grammar translation method. These teaching practice classes reflect the way in which students were taught English at their junior and senior high schools, and the fact that it is a likely supposition that the grammar translation method is still widely used at many schools. Therefore, it is often difficult for the students to teach in their own original ways. As a significant move must be made away from the grammar translation methods and toward a communicative approach, it is necessary for teachers in teacher-training courses at universities to give students enough time to think about what is important for improving their future students' English abilities. It is also necessary for university teachers to introduce new teaching models to their students in order to bring about a great change in English education fields. Based on practical reports from the university classroom, this paper suggests what university teachers can do to address these issues.

1. はじめに

コミュニケーション重視の英語教育は 100 年以上も前から叫ばれながら、未だに大きな変化は感じられない。筆者は 4 年間にわたって大学で教職課程の授業を担当しているが、毎年模擬授業をさせてみて驚くことがある。初回の模擬授業では、学生のほとんどが文法訳読式で、説明中心の授業を実践しようとするのである。中学生に対して新出文法を扱う際も、いきなりチョークを持って板書をしながら文構造から説明しようとする。中には、「he/she とは何か」をメタ言語で説明させようとする学生もいる。ペアになって、「she とは女性を表す名詞の代名詞である」と日本語で確認させ合うのである。また、高校教員になることを勧めた学生からは、「私は高校の指導の方がいいかもしれません。読んで訳すという授業の方が慣れていきますから。」という回答が返ってきたこともある。彼女たちは、教師が説明し、文法訳読式で行うものが英語の授業だと思っているのである。

「人は教わったようにしか教えられない」とはよく耳にする言葉であるが、まさにそれを痛感する日々である。学生たちの模擬授業を見れば、彼女たちが中学で、あるいは高校

でどのような授業を受けてきたかが手に取るようにわかる。本論文では、教職課程を履修する学生たちの模擬授業や、彼らが作成した指導案の様子を紹介しながら、中高英語教育の実態を考えるとともに、教わったことのない指導法を実践させるまでの筆者の指導について記述し、コミュニケーション重視の授業実践をするための提言をしようというものである。

2. 先行研究

2.1 ベネッセ教育総合研究所のデータから

『中高の英語指導に関する実態調査 2015』（根岸・他 2015）は、全国の中学校・高校の校長および英語教員のべ 3,935 人を対象として行われた英語教員の意識調査である。この調査結果によれば、「中学校の指導方法・活動内容は、「音読」「発音練習」「文法の説明」「教科書本文のリスニング」などが9割（「よく行う」+「ときどき行う」の%、以下同）を超え、音声を中心とした指導や文法指導が多い。高校に比べ、「自分のことや気持ちや考えを英語で書く」「英語での会話（生徒同士）」「スピーチ・プレゼンテーション」は特に多い。」という。一方で、「高校の指導方法・活動内容は、中学校と同様に「音読」「発音練習」「文法の説明」が多い。それに対して、「自分のことや気持ちや考えを英語で書く」「英語で教科書本文の要約を話す」「即興で自分のことや気持ちや考えを英語で話す」「英語で教科書本文の要約を書く」などの「話す」「書く」活動の実施率は低く、特に「ディスカッション」「ディベート」は1割未満と低い。」というのが現状のようである。このことは、後述するアンケート調査結果とも共通する点が多い。

2.2 アンケート調査結果から

以下は、筆者の専門ゼミに所属する学生が、個人研究で行ったアンケート調査結果である。福原（2017）は、東京都内の女子大学の学生（国際文化学科、日本文化学科、人間関係学科の1～4年生）566名にアンケートを取り、その結果をまとめたものである。2017年の実施のため、現役合格者であれば、その当時の大学3年生以上は高校において旧学習指導要領下で学んだ学生であり、1、2年生は現行学習指導要領下で学んだことになる。福原は、中学、高校それぞれの英語の授業について以下の10項目について、「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4件法で質問した。

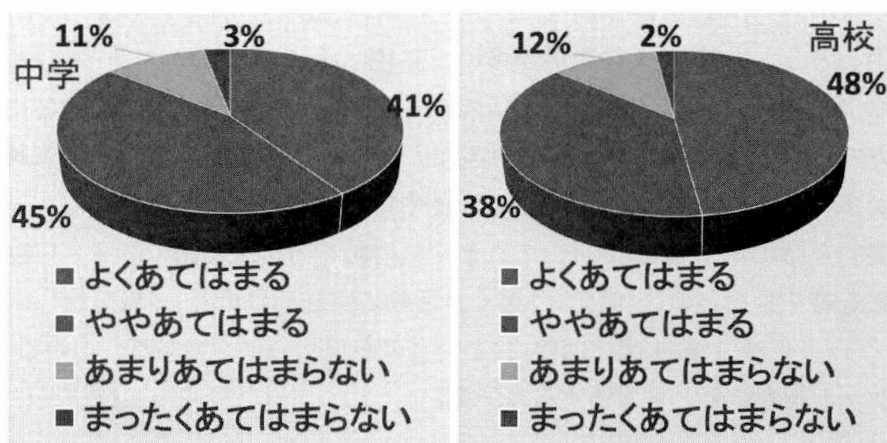
質問事項は以下のとおりである。

- 質問 1 中学（高校）の時、英語の授業は好きでしたか
- 質問 2 教科書を読んで訳すという授業が中心でしたか
- 質問 3 単語や文章の音読を行いましたか
- 質問 4 英語でプレゼンテーションを行いましたか

- 質問 5 英語で討論を行いましたか
- 質問 6 ディクテーション（読み上げられた単語や文章を書きとる）を行いましたか
- 質問 7 シャドーイング（音声を聞いた後に即座に復唱する）を行いましたか
- 質問 8 ネイティブ（ALT）と話す機会がありましたか
- 質問 9 教師は英語を使って授業を行いましたか
- 質問 10 学校の英語の授業で英語は話せるようになりましたか

これらの項目のうち質問 1（グラフ 1）、質問 2（グラフ 2）、質問 9（グラフ 3）、質問 10（グラフ 4）の結果と考察を以下に示す。

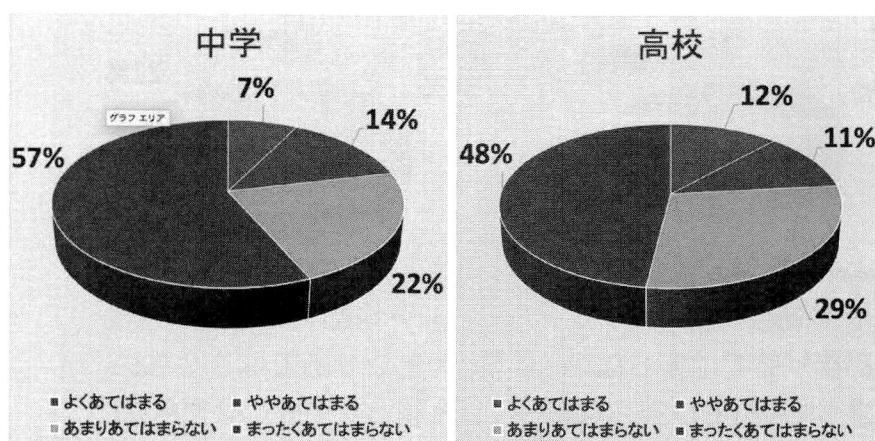
質問 1「教科書を読んで訳すという授業が中心でしたか」



グラフ 1

高校では「よくあてはまる」48%に「ややあてはまる」38%を加えると、なんと 86%が文法訳読式の授業が行われていたことになる。中学でさえ、「よくあてはまる」41%と「ややあてはまる」45%で、高校同様 86%が文法訳読式である。全体の 9 割近くが英文を読んで訳すというスタイルであることには驚きを隠せない。とりわけ、対話文形式の短い英文が多い中学校でさえ、和訳をしていることは驚きを通り過ぎてショックでもある。筆者が担当する教職課程の学生が、中学の教科書を使って模擬授業をする際、内容確認として日本語訳しか考えられないということも十分に納得できる数字である。

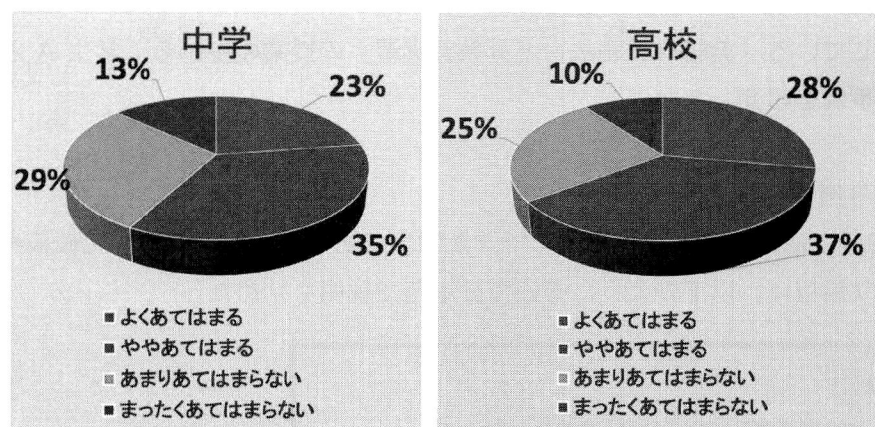
質問 2 「英語でプレゼンテーションを行いましたか」



グラフ 2

中学では「よくあてはまる」7%、「ややあてはまる」14%で、合計 21%。高校では、中学よりも若干多いとは言え、「よくあてはまる」12%、「ややあてはまる」11%で全体としては 23%である。中高で発表活動をした経験のある学生は全体のわずか 1/5 から 1/4 程度である。文法訳読式が中心の授業であれば、プレゼンテーションなど発表活動が行われていないことは想像に難くない。

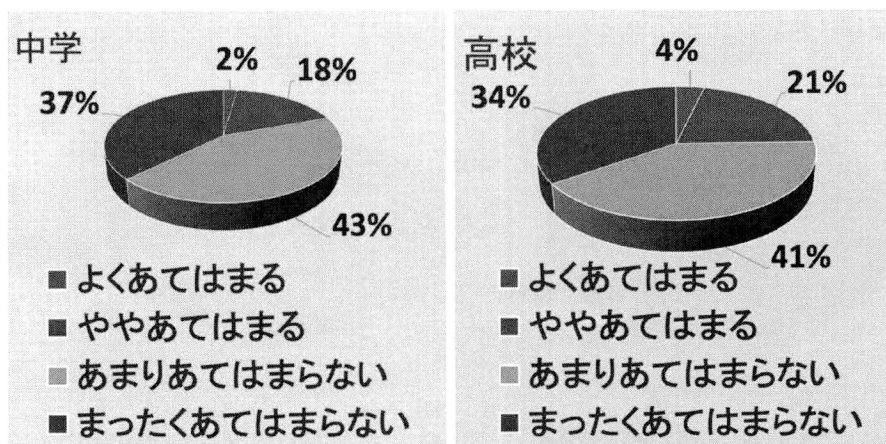
質問 9 「教師は英語を使って授業を行いましたか」



グラフ 3

中学では「よくあてはまる」23%、「ややあてはまる」35%で、全体としては 58%。高校の方が若干多く、「よくあてはまる」28%、「ややあてはまる」37%で全体としては 65%である。「英語の授業は英語で」が現行学習指導要領の目玉のように言われてきたが、それでも全体としては 6 割程度。本来英語を使うべきは生徒であって教師ではないはずだが、それでも教師がこの状態であれば、生徒の英語発話量は推して知るべしであろう。

質問 10 「学校の英語の授業で英語は話せるようになりましたか」



グラフ 4

中学では「よくあてはまる」が 2%、「ややあてはまる」が 18%で、全体としては 20%。高校では「よくあてはまる」4%、「ややあてはまる」21%で全体としては 25%である。中学高校で、教師が英語を使って話すことなく、文法訳読式の授業をしている状況下では、コミュニケーションが十分に行われているとは言い難い。学生たちもそのような授業により英語力が伸びたという実感はないようである。

3. 学生の模擬授業から

筆者が担当している「英語科教育法」と「教育実習」の授業の中から、学生 A と学生 B の模擬授業の事例を紹介したい。

3.1 学生 A の事例

学生 A は中学・高校共に旧課程で学んできた学生である。この学生は、比較級を導入した際、いきなり黒板に、以下のように書いて日本語で説明を始めた。

比較級
S + be 動詞 + 形容詞または副詞 er + than ~.

その際、中学 2 年生に対していきなり文構造を板書して説明を始めて理解できるかどうかを問うたところ、自身は中学時代にこのような指導しか受けていないので、他の方法が思いつかないとのことであった。そこで筆者は、ロシア人形のマトリョーシカに似たパンダの人形（写真 1）を使用して、bigger と smaller がわかるような導入を実際にやって見せた。一番小さなパンダと二番目に小さなパンダを並べて、二番目のパンダを示しながら



写真 1

bigger」と言い、次々に少しずつ大きなパンダを示しながら bigger を繰り返すという単純なものである。smaller についても同様である。すると、そのような指導方法があることを知り、非常に驚いた様子であった。

次のページの表 1-1 と表 1-2 は、3 年次の「英語科教育法」から、4 年次の「教育実習」で行った模擬授業の指導案の一部を授業実施日ごとに並べたものである。3 年の段階では、「説明する」といった教師主導の学習が目立つが、教育実習直前の指導案では視覚的教材を使って、暗示的に導入し、生徒たちが興味を持つような工夫ができるようになってきたことがわかる。

「英語科教育法」の授業では、模擬授業の際、自身のスマートフォンを使用して授業の様子を録画し、家庭で見直して振り返ることを課題として行わせている。ビデオを見て気づいたことを「模擬授業ふりかえり」シートに記入して提出させている。比較級の指導後の振り返りには、「比較級は目に見える形で説明した方が良く、写真など沢山用意して、生徒に気づかせるように促した方が良く」と記録されている。また別の授業後は、「読む回数が少ないと感じました。繰り返すことが大切なのに、文法でも言えますが、少ないので、リピートをこれから多くしていきたいと思いました」とも記録しており、音読を含めた生徒の活動の大切さに気づいたようである。12 月の段階では、「自分の中では、わかりやすいように説明している、やっぱり、多すぎて、書いている文も多すぎて、生徒達に混乱を招いてしまっている、考えていかなければと思いました。」という記述があり、生徒の立場になって授業を行う気持ちが生まれ、その思いが強くなってきたことが確認できる。



写真 2

4 年次 9 月に行った教育実習では研究授業を参観する機会があった。和訳や説明に終始せず、音読活動や生徒が英語を使って活動する場面が多く見られた。笑顔で生徒たちとやりとりする姿も見られ、現場での実習の効果や彼女自身の成長を見ることができた。

写真 2 は学生 A による教育実習の研究授業の様子である。

表 1-1

模擬授業 実施日	学習活動	教師の働きかけ	生徒の学習活動	指導上の留意点(○) 評価(◎)
2017.7.20	文法確認 (13分)	・パワーポイントを使用し、比較級の説明をする。	・プリントやパワーポイントの画面を見て、音読し、構造を理解する。	・プリントを使用 (○)ただの音読にならないようにする (◎)構造を理解しているのか
2017.10.26	まとめ (5分)	おさらい ・日本語で要点を簡単に説明する	再確認し、理解する	(○)本時の内容を簡潔に説明する
2017.11.9	文法導入 (10分)	・パワーポイントで絵を沢山使い、絵と対話形式で、話を進める ・最初は前の単元の現在形(主に三人称単数)を使った文を出し、助動詞canの文に言い換えリポートさせる ※途中から生徒に質問し答えさせる ・(初め)She plays the piano. (生徒に質問し自分について答えさせる)	・前の単元を理解しているようにする ・言い換えが理解できるようにする	(○)助動詞canを強調して言い換える (◎)助動詞canをある程度理解し、文法確認でもスムーズに入れるか
2017.12.7	本文導入 (10分)	・次に、Do you like sports?という説明をなげかけ、様々なスポーツの写真と共に名称を表示し、リポートさせる ※途中から生徒に質問し答えさせる ・wheelchair basketballについて話をする	・スポーツについて興味を持てるようにする	(○)生徒がついてきているのか確認しながら進める

表 1-2

模擬授業 実施日	学習活動	教師の働きかけ	生徒の学習活動	指導上の留意点(○) 評価(◎)
2017.1.14	文法導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューしてきた内容を話す。 <p>→Katsuo likes baseball.</p> <p>He can run fast. He wants to be a baseball player. Sazae likes dramas. She is good at copying other people. She wants to be an actor.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訳してもらい、 <p>want to ~の文は何て言っているか考える</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文法の構造を理解する ・今まで習った事が分かっているようにする 	(○)生徒に質問をなげかけることを忘れない (◎)文の内容を理解しているか
	文法確認 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板を使い、want to ~の説明をする <p>※不定詞の名詞的用法ということも説明する</p>		(◎)説明した内容が理解できているか
	文法練習 (20分)	<ul style="list-style-type: none"> ・誰のことを言っているのかゲームで、want to ~の文の確認と職業の名称を覚える 	<ul style="list-style-type: none"> want to ~と職業の名前を覚えるようにする 	(◎)間違いを恐れずに、文を作ることができる
2018.7.7	本文導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリアについて話をする(実物、絵、イラストを加える) <ul style="list-style-type: none"> ・本文に入る 	<ul style="list-style-type: none"> ・新たな知識をつけることができるようにする ・興味を持つようにする 	(○)生徒がついてきているのか確認しながら進める

3.2 学生 B の事例

学生 B は、中学 3 年生から、そして高校では入学時から現行学習指導要領下で学んできた学生である。しかしながら、学習指導要領が変わったからと言って、学校現場の指導法は旧態依然としていたことが、彼女の模擬授業から推察された。彼女の指導法の特徴は、生徒に文法の説明を日本語でさせることである。確かに、自身の言葉で文法事項などを説明できることは深い理解につながることもあるだろう。しかし、中学初期段階でいきなり行うべき活動ではない。彼女が作った模擬授業のシナリオ(表 2)には、以下のように書かれている。

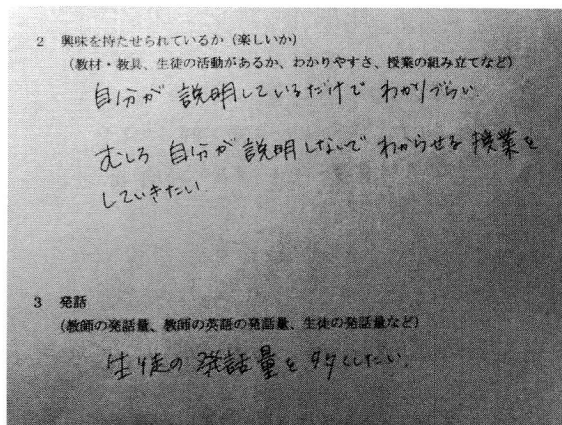
表 2

導 入	・あいさつ Hello, everyone! / How are you? What day is it today? / What's the date today? / How's the weather today?
	・キャラクターで She / He の説明をする。 (例えば、ディズニー映画『アラジン』の登場人物で説明する。) ○ジャスミン: This is <u>Jasmine</u> . ↙ <u>She</u> is a princess.
	○アラジン: This is <u>Aladdin</u> . ↙ <u>He</u> is a robber. (rob = <動詞> 盗む)
	○ジーニー: This is <u>Genie</u> . ↙ <u>He</u> is <u>his</u> friend. ☐ his とは、(所有格)~の、という意味の、代名詞です。 ここでは、 <u>Aladdin</u> (アラジン)のことを指しています。 ◎代名詞は最も直前にある名詞を意味します。
	・ペアで She / He の使い方を説明しあう。 今、説明したことを、隣の人に、同じように説明してください。
・本時の目標を確認する。 本時の目標: 【She / He ~.】 の表現を理解し、使えるようになろう。	

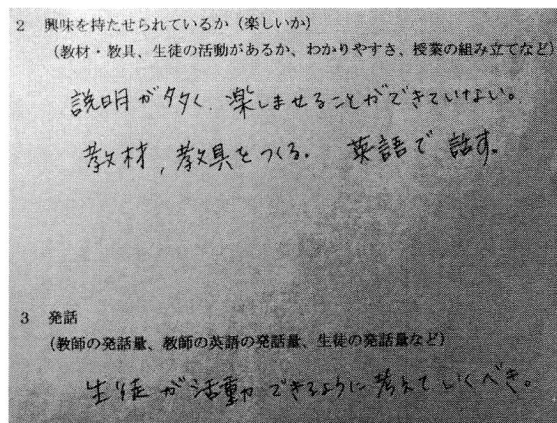
映画『アラジン』を使い、登場人物を紹介しながら he / she を導入するやり方は、生徒の興味喚起としては有効な方法である。しかし、英語による説明は1回のみで、さらに日本語を多用しながら、未知語の robber や未習の代名詞の所有格も説明している。挙句の果てには「今、説明したことを、隣の人に、同じように説明してください。」と日本語で指示を出した後、生徒たちには、ペアで he / she の使い方を説明し合うことを求めてしまうのである。彼女自身、中学と高校ではこのような指導を受けてきたようである。

しかし、模擬授業を繰り返した結果、彼女の「模擬授業ふりかえり」シートに変化が見えるようになってきた。以下は、ふりかえりからの抜粋である。

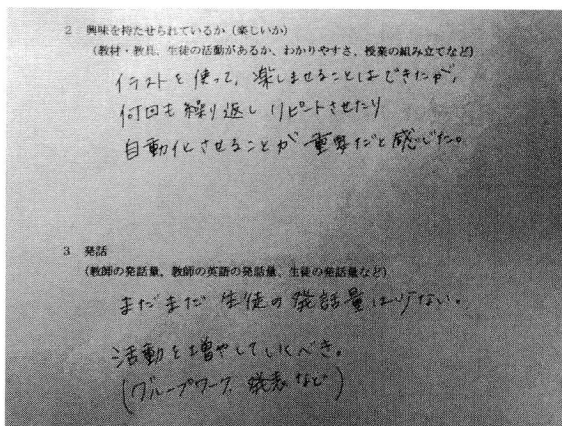
2019年9月26日



2019年10月3日



2019年10月10日



ビデオを見返すことで、教師の説明が多く、生徒の活動が少ないことに気づいている。そして、その点をどうにかして変えていきたいという気持ちが読み取れる。12月に実施した授業公開の折には、自身の専門ゼミの指導教官が参観する中、堂々と英語だけを使って約40分間の模擬授業をやり切った。当初は暗い表情で、眉間に皺を寄せながら授業を行っていたが、模擬授業回数を重ねるごとに、余裕も出てきたのか、明るく笑顔で授業をすることもできるようになってきた。本年の6月には地元の山梨県で教育実習を行うが、彼女自身のさらなる成長を期待したい。

4. まとめ

若林 (2016) は、文法訳読式授業を話題として取り上げている。その中で、抽象的文法用語操作を覚えてはいるが、その文法項目が、英語という言葉の中でどのような働きをするのかについては全く無知である高校生の例を挙げた。そして、そのような学びは、高校生の責任ではなく、この高校生を教えた高校英語教師の責任であると主張している。

さらに、若林 (1985) (若林 2016 より転載) は、その著書の中で「こうすれば英語ギラ

イになる」と題して、5つの定理を示している。それは、「定理1 方向を見失わせること」「定理2 質問を無視すること」「定理3 手助けをしないこと」「定理4 難しく教えること」「定理5 ウソを言うこと」である。つまり、これらの行いが生徒たちの「やる気」を喪失させてしまうというのである。筆者が知る多くの中学高校英語教師の中には、この定理に該当するような指導をしている教員は見当たらない。しかしながら、全てに該当しないまでも、どれかに該当する教員は日本全国には相当数いるのではないかと推察する。

上述した書籍のタイトルはずばり『英語は「教わったように教えるな』』である。教わった方法が文法訳読式であることが前提となっている。本研究を通じて、学生たちの模擬授業は、彼女たちが中学高校時代に受けた授業や、担当教員の影響が非常に大きいことを痛感した。これまで体に染み付いた学習方法または指導方法を学び直すことはそう簡単なことではなく、かなりの時間と訓練を要することもわかる。ただ、時間はかかろうとも、柔軟な思考を持つ学生たちは、やがて教育の本質に気づき、生徒のことを考えた授業作りができるようになっていくことも感じている。そのために教職担当教員ができることは何かを考えなくてはならない。

5. コミュニケーション重視の授業実践のための提言

学習指導要領が新しくなり科目名が変わっても、旧科目の読み替えで授業が行われている現実がある。それは教師の意識改革がいかに難しいかを示している。教職課程の学生にも意識改革が必要である。まとめでも述べたように、学生たちは柔軟な思考ができる。ただ、これまでの体験からそのきっかけがなかっただけである。最後の章では、これからの若い教師たちが「教わったようにしか教えられない」状況から抜け出し、コミュニケーション重視の授業実践ができるようになるための提言をして、本論文の締め括りとしたい。

5.1 「よき見本を示す」

日本全国には様々な取り組みをしたり、アイデアを持つ先生方が大勢いる。学習指導要領に則った、そして時代に相応した指導方法の実例を示すことが必要である。ジャパンライムが販売している「達人シリーズ」や、YouTube などでも実際の授業ビデオを視聴させることができる。その際ただ映像を流しっぱなしにするのではなく、時折ビデオを止めながら、「今の活動の目的はなんだと思うか?」とか「気づいたことはないか?」など、学生とのインタラクションを図りながら行うとさらに効果的である。同時に、それぞれの活動には意味があり、手順があることも指導するべきである。ビデオなどの映像だけに頼るのではなく、実際に授業参観を行うことも意味がある。担当教員自らが模範授業を積極的に見せたり、指導法について話をする機会を設けることも大事である。実際に目の前で授業を行うことで、学生は生徒になったつもりで指導法を体験できる。また、その都度わからないことがあれば、直接指導者に問うことができるので、活動の意味などを深く知る機会となる。筆者はこれまでに、「一般財団法人 英語教育協議会 ELEC 英語研修所」や「オ

ックスフォード大学出版局株式会社」、「株式会社アルク」等の主催の教員セミナー、加えて都道府県の教育委員会主催の研修会でも数十回以上にわたって講師を務め、全国の英語の先生方に英語の指導法について話をしている。それらの経験をもとに、研修会でやっていることと同様の話やワークショップを授業内で積極的に行い、学生たちに指導法のノウハウを伝えている。

5.2 「体験を通して学ばせる」

インプットとアウトプットが必要なのは、英語学習法のみならず英語指導法の学びの場面でも同様である。そのためには、学生たちに模擬授業をさせることが一番良い。教職課程における模擬授業の重要性は、『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書』にも明記されているとおりである。模擬授業の実施については、学生数の問題などから難しい事例もある。しかしながら、必ずしも 50 分間の授業である必要はない。導入部分だけでもよいし、生徒の活動の場面だけでもいいので、実際に行うことが大切である。さらに自分の模擬授業をスマートフォン等で録画し、それを見直しさせる。教師の発話量は適切か、生徒の活動は十分行われているかどうかなど、観点を決めて振り返るのである。その上で、時間的な制約が許すのであれば、反省点を改善し、もう一度同じ授業をやり直させたい。これらの体験を積み重ねることで、学生たちは効果的な指導法を身につけ、自信を持って授業を行うことができるようになる。

十分なインプット（授業体験）とアウトプット（模擬授業）こそが「教わったようにしか教えられない」状況から脱却し、教師としての意識改革を図るための最善の策である。このことは、教職課程の学生だけではなく、文法訳読式から抜け出せない現職教員にも有効な手立てであることは言うまでもない。

最後に、本論文は筆者の担当する教職課程で学ぶ学生の協力なくしはできなかったものである。学生に謝意を表する

参考文献

- 東京学芸大学. (2017). 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書』 .Retrieved from <http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/>
- 福原萌. (2017). 「中高の英語教育について」 .中野ゼミレポート.
- ベネッセ教育総合研究所. (2015). 「中高の英語指導に関する実態調査 2015」 .
<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4776>(2020 年 1 月 14 日閲覧)
- 若林俊輔(著),小菅和也,小菅敦子,手島良,河村和也,若有保彦 (編). (2016). 『英語は「教わったように教えるな』』 .研究社.